

加藤 誠先生 —日本古生物学会名誉会員を偲んで—

江崎洋一



加藤 誠 日本古生物学会名誉会員（北海道大学名誉教授）が令和4年6月26日未明にご逝去されました。享年90歳でした。

ご逝去の一報は、ご親族のみでの葬儀が執り行われた一週間後に、ご息様からの電子メールで知らされました。時折しも日本古生物学会2022年年会の会期中で、加藤先生の直弟子、孫弟子、ひ孫弟子らによるサンゴの研究発表の終了直後でした。令和4年3月に急に体調を崩されたとのことでした。

加藤先生は昭和7年宮城県栗原郡築館町（現 栗原市）でお生まれになりました。昭和29年に金沢大学理学部地学科を卒業後、昭和30年12月まで総理府事務官を務められました。その後、昭和31年に北海道大学理学部地質学鉱物学専攻修士課程に入学され、昭和33年に同課程を修了、昭和34年から36年に大英自然史博物館およびインペリアル・カレッジ・ロンドンに留学されました。昭和36年に北海道大学同専攻博士課程を退学され、同大学理学部地質学鉱物学科第二講座（層位学講座）助手に任官されました。昭和37年に在英中の研究をもとに学位論文提出し理学博士の学位を取得され、昭和45年に助教授に、昭和56年に教授になりました。平成7年に北海道大学を退官されました。

北海道大学に在任中には、中・古生代の地質やサンゴ化石で代表される古生物の研究で数多くの業績をあげられています。その他、応用地質、地学教育、国際交流などの方面でも重要な貢献をされています。ストックホルム大学（スウェーデン）、クイーンズランド大学（オーストラリア）、リエージュ大学（ベルギー）、フランクフルト大学（ドイツ）、中国地質大学、中国科学院南京地質

古生物研究所の客員教授としても勤務され、また、昭和45年に日本古生物学会 学術賞、昭和55年に日本地質学会 小藤賞、昭和63年に日本地質学会 論文賞を授与されています。退官後には、北海道大学総合博物館・資料部研究員、国際協力機構（JICA）のインドネシア派遣専門家、札幌国際大学教授、スウェーデン地質学会終身会員、北海道スウェーデン協会会長、北海道日英協会理事として活躍されました。

加藤先生は海外旅行を趣味とされ、自ら「物見高いもので」とおっしゃっていました。好奇心が人一倍旺盛で行動力も抜群でした。とは言っても、加藤先生は決して饒舌ではなく、物腰柔らかく穏やかな話し方をされる方でした。スーツ姿がとてよく似合う紳士であり、研究上の話にも「なるほどなるほど、それで」と真摯に耳を傾けてくださる「聞き上手」の先生でした。今もお写真を拝見していると、「調子はどうですか。（研究を）やっていますか」との声が聞こえてきます。記憶力が抜群で博覧強記であった加藤先生は「北大古生物学の巨人」と称されていました。日常会話の時には必ずと言っていいほど、湊正雄先生の話が出てきました。恩師の湊先生には常に畏敬の念を抱いておられ、「偉い先生がいたものです」とおっしゃるのが加藤先生の口癖でした。

この後の段では、本追悼文の性格上、とくに古生物学の話題を中心に紹介したいと思います。加藤先生は数多くの役職を務められましたが、古生物学関連では、日本古生物学会評議員、国際古生物学協会（IPA）事務局長、国際化石刺胞動物・海綿動物研究会（現、国際化石サンゴ・礁学会）副会長などを歴任され、国際的にも知名度が高い古生物学者でした。

加藤先生には数多くの論文や著書がありますが、サンゴ化石に限定すると、次の論文が代表的です。まず、「Fine skeletal structures in Rugosa」（1963年出版）です。本論文は、加藤先生が英国留学中のサンゴ薄片の観察データや考察事項に基づいた博士論文の内容です。四射サンゴの骨格（とくに隔壁）に見られる微細構造を初生的な構造と二次的な構造に峻別し、初生的な微細構造の分類学上の有用性を指摘しています。観察手法や解析手法が飛躍的に発展した今日でも概ね支持されている先駆的な見解と言えます。次に、湊正雄先生と共著で出版された、「Waagenophyllidae」（1965年）、「Durhaminidae」（1965年）、「The rugose coral family Pseudopavonidae」（1975年）などの一連のモノグラフが挙げられます。前二者では、それまで分類が混乱していたペルム紀の四射サンゴが、床板の形状をもとに2大分類群に明瞭に区別できることを示し、当時のサンゴ生物地理区にテチス区とボレア区が識別できることを明確にしています。とくにWaagenophyllidae科のモノグラフの出版によって、本科の分類体系が整備され、その後、テチス区におけるペル

ム紀サンゴの研究レベルが飛躍的に向上しました。さらにPseudopavonidae科のモノグラフの出版により、本科の分類体系が整備されただけでなく、石炭紀に日本固有の四射サンゴ群が存在することが明確になりました。その知見は、1980年代に入り大きく見直されることになった日本列島の地帯区分や形成史を、大型化石の産出の点から裏付ける重要な証拠につながっています。

研究に対する指導では事細かに口出しはせず、ゼミ発表や論文原稿のチェック時に意見を述べられるというスタンスでした。学生の自主性を尊重し、学生自らに考えさせるというのが基本でした。学生にとっては枠に縛られることなく、のびのびと研究に打ち込める理想的な環境でした。もっとも、こちらからの質問に対しては懇切丁寧に返答してくださいました。私の場合、大学院生時にはサンゴ化石の記載を中心に研究を進めていたため、「先生の部屋で文献調査を行いたいです」と申し出ると、「ドアのオートロックを解除しておくから、夜に自由に調べなさい」とおっしゃってくださったことが何度もあります。著者ごとにきれいに整理されていた論文別刷や論文複写（印画紙に写真記録）をチェックしていたら、空が明るくなっていたこともあります。ちなみに、サンゴ化石関連の文献だけは、晩年（正確には平成30年4月）までご自宅で大切に管理されていました。サンゴに対する並々ならぬ愛着が消え失せることがなかった証だと思えます。国際会議での口頭発表前には、「発表には必ずジョークを入れること」とアドバイスされました。私の発表ではジョークを入れる余裕など全くなかったのですが、当のご本人の発表時には、きちんとジョークが入っていました。それも会場が爆笑の渦に巻き込まれるようなジョークでした。英語がとても堪能であった加藤先生ならではのなせる業だったように思います。実は即興のジョークだったのかもしれない。アメリカ人の研究者に、「マコトは何語で考えているのか」と質問されているのを聞いた覚えがあるほどです。オーストラリアのホテルでテレビのクイズ番組を観ていた時に、解答者よりも先に英語で正解を答えられていたこともありました。英単語の語源の解説に始まる、正確な英語発音の指導はわれわれにとって掛け替えのない財産になっています。

最後に、私が経験した加藤先生の晩年のご様子に触れます。加藤先生に最後にお会いしたのは、コロナ禍が始まる直前の令和元年11月（当時87歳）、北海道大学で開催された「日本サンゴ礁学会 公開シンポジウム」の場でした。私の講演の終了後に言葉を交わしたのが最後になりました。大学へは自らが自動車を運転して来られていました。「自動車がなければ生活が不便だね」とおっしゃっていました。加藤先生と最後に行動をともにしたのは、その4ヶ月前の7月に2泊3日の日程で、東日本大震災で被災したサンゴ標本の鑑定を岩手県陸前高田市立博物館（当時は仮設）で行ったときでした。この標本鑑

定の依頼は、日本古生物学会の真鍋真会長（当時）から江崎にありましたが、長年、北上山地のサンゴ化石の研究に携わってこられた加藤先生を推薦しました。しかし、ご家族が健康面を気遣われ、江崎が同行するということが出張鑑定が実現しました。仙台空港の到着ロビーで待ち合わせ、電車を乗り継ぎ陸前高田近くまで移動しました。JR大船渡線沿線の車窓からの景色に、ご自身の若き日の調査風景を重ね合わせ、「懐かしいなあ」としきりにおっしゃっていました。鑑定の作業中は、専らルーペを片手にサンゴの風化表面を一瞥され、鑑定結果を黙々と紙に記されていました。現地に滞在中に地元の新聞社の取材がありました。「陸前高田には世界で初めて報告された化石がたくさんあります。地元の方々には、とても素晴らしい宝物が身近にあることを誇りに思っています。これまでに標本のレスキュー活動に尽力された全国各地の博物館関係者に敬意を表します」と述べられ、地元出身の記者の方が涙されていました。調査後に受け取った手紙には、「無事にお役目を果たせてホッとしています」と綴られていました。加藤先生との共著の出版物としては、2014年に発表した新属新種（*Yamatophyllum ultimum*）の論文が最後になりました。「このサンゴには四射サンゴたる本質的な形態要素が端的に認められ、しかも本邦石炭系に固有です。日本的な属名を提唱し、と一緒に論文を執筆したいです」との申し出をご快諾いただき、議論を重ねました。後日、「80歳を過ぎてサンゴの論文を発表できました」と嬉しそうに話されていました。加藤先生とのコミュニケーション手段の大半は手紙でした。手紙を差し上げると、必ず温かい激励の言葉が添えられた直筆の返事をくださるとも律儀な先生でした。私の手もとのファイルを見ると、よくもこれだけ頻繁に手紙のやり取りを行なっていただけだと、改めて思いやりあふれる先生のご性格が偲べれます。往復書簡は令和4年の正月まで続いていました。文章内容に齟齬もなく、まだまだお元気でしっかりされていると安心していました。

本追悼文には私に関わったエピソードを含めましたが、それらは必ずしも私個人に特別なものではなく、多くの関係者に共通する内容が含まれているように思います。関係者の方々は「そうそう、加藤先生はそうだったよね」と頷いているはずです。

われわれ（元）指導学生に深い愛情をもって接してくださった先生は、ご家庭内でもお優しいことはいくらでもありません。奥様と4人のお子様、そして4人のお孫さんが日本各地で生活されています。平成23年の8月にベルギーのリエージュで開催された国際化石刺胞動物・海綿動物研究会の会議には、ご夫婦で参加されました。「今年が結婚50年目で、今回の旅行は子供達がすべてアレンジしてくれました」とプレゼントされたシャンパンを片手に話されていました。 合掌